

稻作情報

秋田地域振興局 農林部 農業振興普及課

TEL:018-860-3410

FAX:018-860-3834

定点ほ場の平均収量は平年比103%。ただし、ほ場間差が大きい。

1 気象経過(令和7年4月1半旬～9月6半旬)

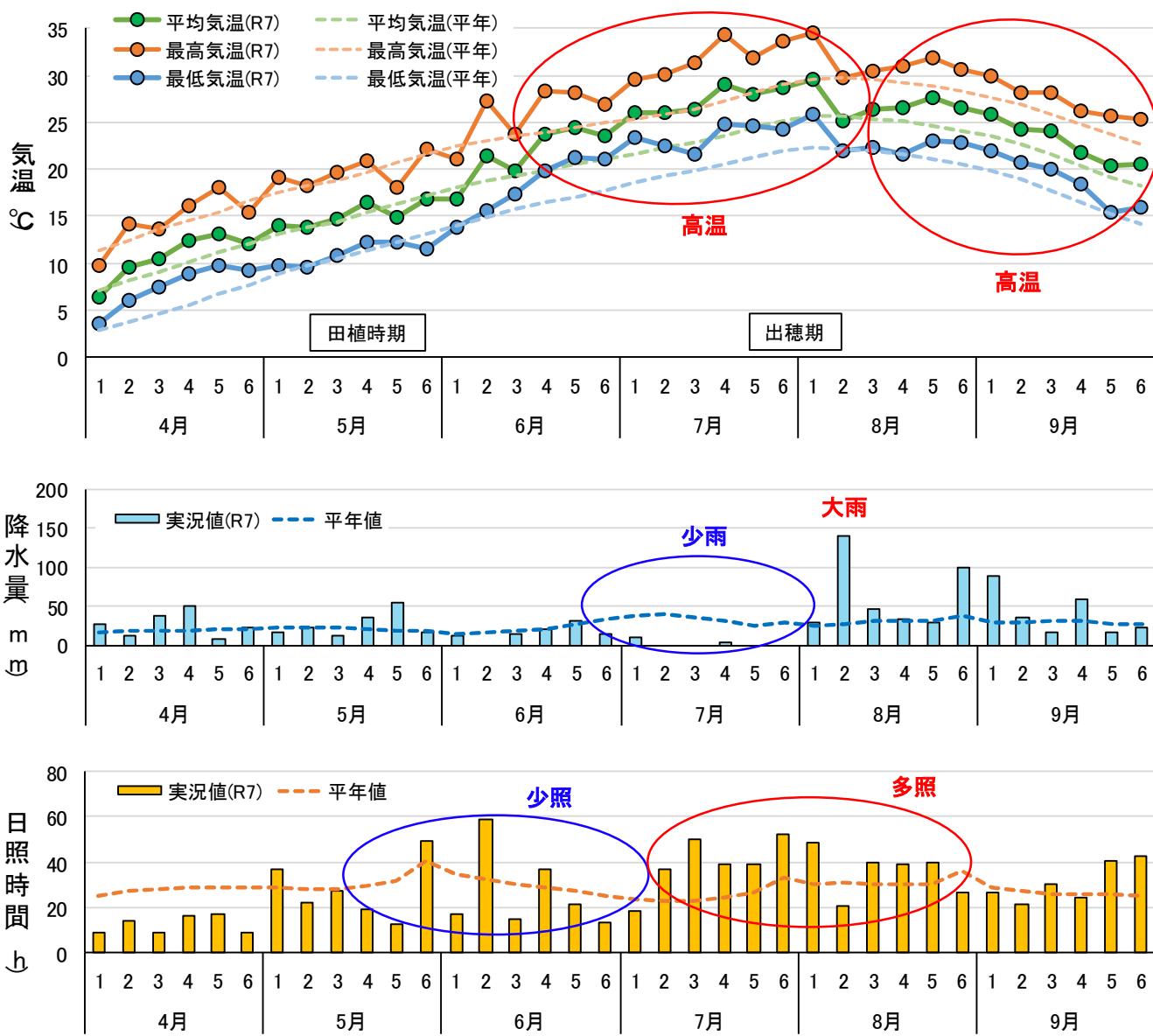


図1 気象経過と平年値 (アメダス秋田、秋田県農業気象システムから引用)

〈概況〉

春先の断続的な降雨で春作業が遅れた影響により、管内の播種盛期は平年より2日遅い4月19日になりました。育苗期間中は日照時間が少なく、苗ヤケや病害の発生は少なかったものの、葉色がやや淡い苗が多い傾向となりました。

移植後の低温により、活着の遅れがみられたほか、生育が停滞し初期分けの発生が抑制されました。

7月は記録的な高温少雨となり、生育が早く推移したほか、中干し時期を過ぎても長期間入水できないほ場が多く確認されました。

管内全体の出穂期は7月29日で平年より2日早くなりました。出穂期以降も気温が高く、本年も高温下での登熟となりましたが、断続的な降雨もあり順調に登熟したと考えられました。

2 作業進捗と生育経過

(1)播種～田植え

管内の播種作業は始期(5%)が4月9日(平年差±0日)、盛期(50%)が4月19日(同差+2日)、終期(95%)が5月1日(同差+5日)で、春先の断続的な降雨で春作業が遅れた影響を受け遅くなりました。

育苗期間中は日照時間が少なかったため、苗ヤケや病害の発生は少なかったものの、葉色がやや淡い苗が多い傾向となりました。

耕起作業は、断続的な降雨によって大幅に遅れ、始期が4月20日(平年差+6日)、盛期が4月30日(同差+5日)、終期が5月15日(同差+10日)となりました。

田植作業は、耕起作業が遅れた影響等により、始期が5月8日(平年差-1日)、盛期が5月20日(同差+2日)、終期が6月1日(同差+4日)となり、大規模法人を中心に田植作業が遅くなりました。

直播栽培の播種作業は、始期が5月8日(前年差+3日)、盛期が5月14日(同差±0日)、終期が5月22日(同差-1日)でした。

田植え期間中の移植翌日からの5日間移動平均気温は、概ね中苗移植の適温とされる14°C以上が確保されていたものの、5月下旬に移植したほ場では低温寡照に遭遇し、植え痛みや活着の遅れがみられました。

(2)分けつ始期～有効茎決定期

5月5半旬～6月1半旬の気温は平年並～低く推移したため、移植後の水稻の生育は停滞し、初期分けつの発生が抑制されました。

6月10日の定点調査結果(品種:あきたこまち、9地点平均)は、草丈 22.2cm(平年比 86%)、茎数 111 本/m²(同比 72%)、葉数 6.2 葉(同差-0.3 葉)となりました。

6月2半旬以降の高温により、停滞した生育が回復したため、6月25日の定点調査結果は、草丈 42.8cm(平年比 108%)、茎数 378 本/m²(同比 92%)、葉数 9.2 葉(同差+0.1 葉)、葉色 44.0(同比 100%)となりました。

(3)最高分けつ期～減数分裂期

7月4日の定点調査結果は、草丈 61.5cm(平年比 113%)、茎数 454 本/m²(同比 93%)、葉数 10.6 葉(同差+0.2 葉)、葉色 43.1(同比 98%)となりました。

7月15日の定点調査結果は、草丈 73.4cm(平年比 110%)、茎数 451 本/m²(同比 94%)葉数 11.9 葉(同差+0.5 葉)、葉色 40.4(同比 98%)となりました。栄養診断では、栄養不足であるI型やII型に分類されるほ場が確認されました。

7月25日の定点調査結果は、草丈 86.3cm(平年比 109%)、茎数 413 本/m²(同比 92%)、葉数 13.2 葉(同差+0.6 葉)、葉色 34.4(同比 89%)となりました。

また、7月は記録的な渇水となり、中干し期を過ぎても長期間入水出来ないほ場が多く確認されました。

(4)出穂期～収穫期

定点調査ほの出穂期は平年より3日早い7月27日、成熟期は平年より4日早い9月9日となりました。

収穫作業は成熟期が早かったことにより、刈り始めは早くましたが、断続的な降雨により徐々に進捗は遅くなり、刈り取り始期は9月12日(平年差-4日)、盛期は9月26日(同差-1日)、終期は10月13日(同差±0日)となりました。

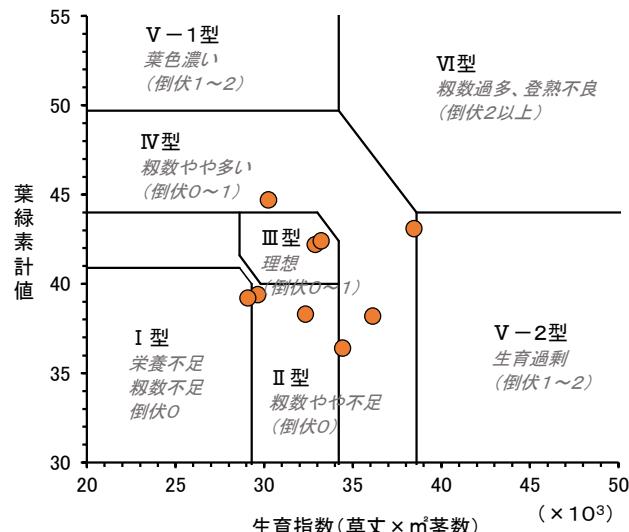


図2 管内定点調査ほの幼穂形成期における栄養診断(あきたこまち9地点)

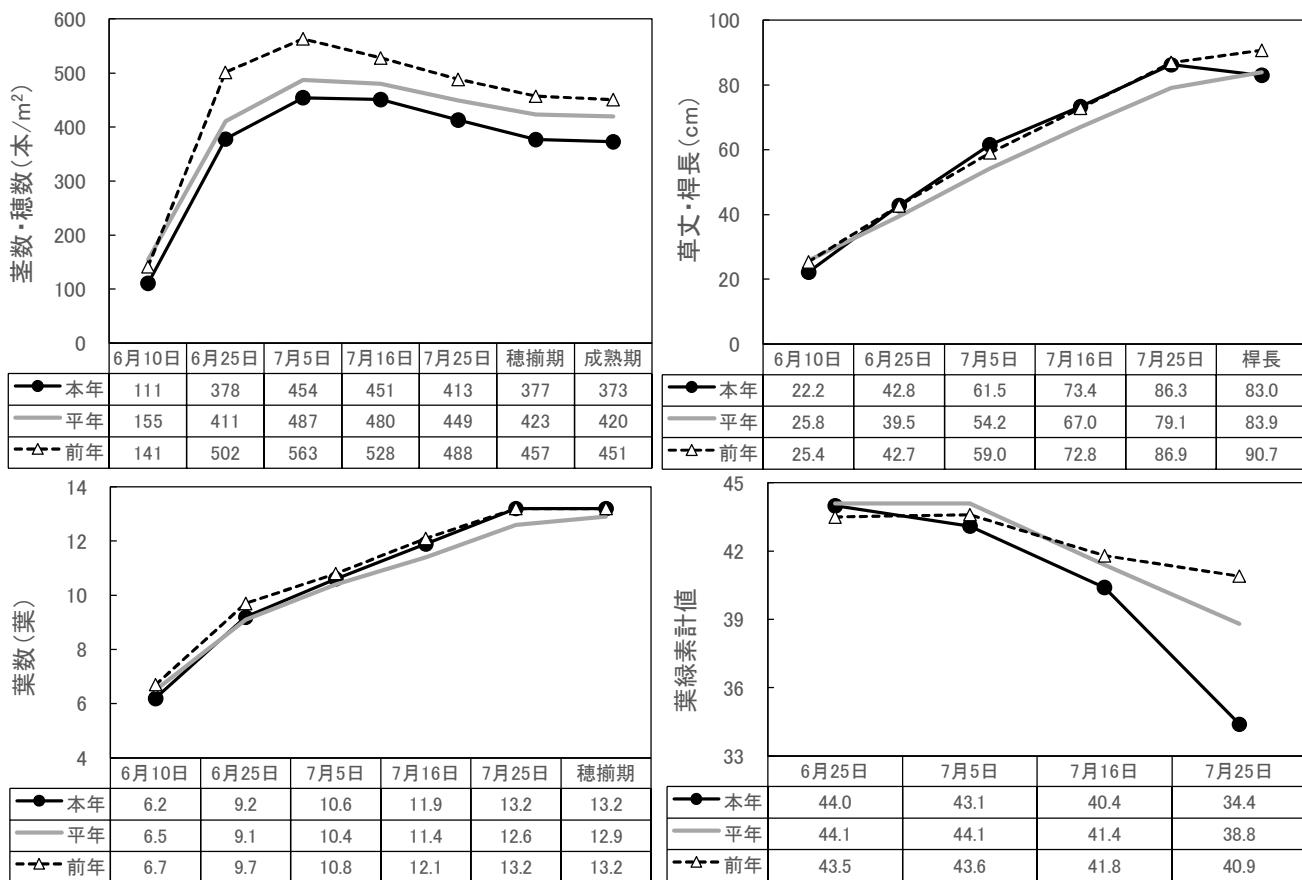


図3 管内定点調査ほの生育推移(あきたこまち9地点平均)

3 作柄の状況

(1) 収量・収量構成要素について(あきたこまち、表1・図2)

1穂粒数は79.6粒(平年比108%)と多くなりましたが、穂数は373本/m²(同比89%)と少なかったことから、m²当たり粒数は29,336粒(同比95%)と少なくなりました。出穂後は気温が高く推移しましたが、順調に登熟したため、登熟歩合は88.2%(平年差+0.6ポイント)とやや高く、千粒重は23.1g(同比104%)と多くなりました。この結果、玄米重は575kg/10a(平年比103%)とやや多くなりましたが、定点ほ場別に見ると、玄米重は461kg/10a～649kg/10aとほ場間差が大きい状況でした。

表1 管内定点調査ほの収量および収量構成要素

(あきたこまち、9地点平均)

	玄米重 kg/10a	穂数 本/m ²	1穂 粒数	m ² 当たり 粒数	登熟歩合 %	千粒重 g
本年	575	373	79.6	29,336	88.2	23.1
平年比・差(±)	103%	89%	108%	95%	0.6	104%
前年比・差(±)	94%	83%	107%	87%	5.3	105%
	稈長 cm	穂長 cm	全重 kg/10a	わら重 kg/10a	精粉重 kg/10a	
本年	82.1	18.4	1,478	688	761	
平年比・差(±)	100%	103%	100%	96%	104%	
前年比・差(±)	92%	101%	94%	96%	99%	

<参考>作柄概況について

東北農政局が11月18日に公表した作物統計調査では、県中央部の収量はふるい目1.9mmベースで549kg/10a、作況単収指数は「103」でした。

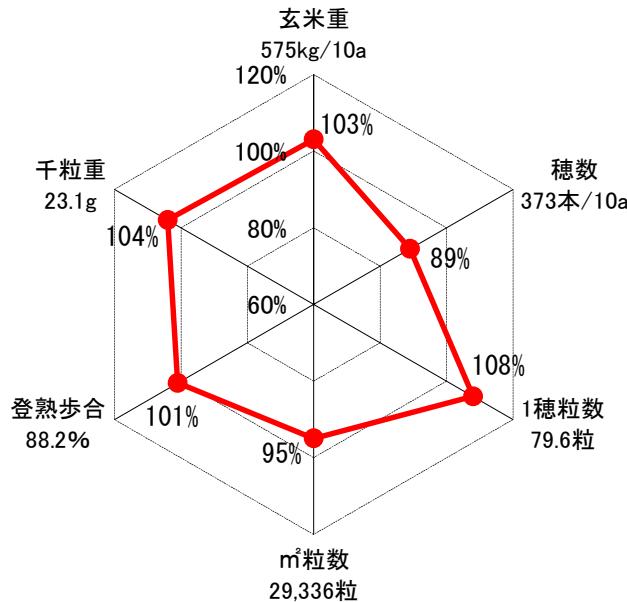


図2 管内定点調査ほにおける収量構成要素の平年比
(あきたこまち、9地点平均)

(2)品質・等級の状況

東北農政局によると、秋田県における令和7年産水稻うるち玄米の1等米比率は92.5%（速報値、10月31日現在）で過去4年の同期と比較して最も高くなりました。また、主な落等理由は着色粒52.0%、形質38.6%、被害粒5.0%となっています。

(3)生育および作柄に影響した要因

①緩慢だった初期生育及び茎数不足

田植盛期後にあたる5月下旬の断続的な降雨やそれに伴う低温寡照によって、活着の遅れが見られ、初期生育が緩慢に推移しました。また、6月は気温が高かったものの、日照時間の少ない日が多くなったことから、地温の上昇が抑えられ、分けつの発生が緩慢になり、茎数を十分に確保できなかったほ場が多くなったと考えられます。この茎数不足が成熟期の穂数不足に繋がりました。

②7月の記録的な高温少雨

7月は気温がかなり高く推移し、降雨がほとんどありませんでした。このため、用水を河川やため池等から引いているほ場では、中干し期を過ぎても入水することができず、稻の葉身がこより状になっているほ場も確認されました。ほ場によってはこの高温少雨による干ばつ害で減収に繋がったと考えられます。一方で、この高温少雨により十分に中干しが出来たことによって、下位節間の伸長が抑制されるとともに、地中深くに根を張らすことができたため、倒伏抑制につながったと推察されます。

③登熟歩合と玄米品質の向上

登熟期間中は気温が高く推移しましたが、断続的な降雨もありました。登熟期間中の土壤に十分な水分が含まれていたため、登熟歩合がやや高く、千粒重が多くなったと考えられました。

出穂期後20日間の日平均気温が26°C～27°Cを超えると、白未熟粒が発生しやすくなります。特に出穂期後15日後頃までの高温で乳白米が多発すると言われています。管内全体の出穂期（7月29日）後20日間の日平均気温は、27.2°Cと高温障害が発生しやすい気温で推移しましたが、日平均気温が27.0°Cを超えた日数は8日（1等米比率が著しく低下した令和5年は18日）とそれほど多くなかったことから、異常高温による品質低下には至らなかったと考えられました。

(4) 病害虫の発生状況

①苗立枯病・もみ枯細菌病(発生量:やや少ない)

育苗期間中は日照時間が少なかったことから、ハウス内の急激な温度上昇が抑えられ、苗立枯病やもみ枯細菌病の発生はやや少なくなりました。

②いもち病(葉いもち 発生量:やや多い、穂いもち 発生量:平年並)

病害虫防除所が7月5半旬に実施した調査によると、全県の葉いもち発病株率は1.8%（平年2.5%）で平年並、発病地点率は17.5%（平年13.5%）でやや高くなりました。また、穂いもちの伝染源となる上位2葉の発病株率は0.3%（平年0.2%）とやや高く、同地点率は6.3%（平年2.8%）で高くなりましたが、県中央部では上位2葉の発病は確認されませんでした。

BLASTAM法による葉いもち感染好適日判定の結果、本年の全般発生開始期は7月1日（平年7月6日）でやや早くなつたことから、葉色が濃いほ場を中心に病斑密度が高くなり、葉いもちの発生量はやや多くなつたと考えられました。葉いもち多発ほ場では穂いもちの発生が確認されましたが、7月の高温少雨によって葉いもちの上位葉への進展が抑制されたことや薬剤防除の実施等により穂いもちの発生は平年並になつたと考えられました。

③紋枯病(発生量:平年並)

本年は茎数が不足傾向で、7月は記録的な高温少雨であったため、初発は遅かったと考えられますが、8月以降、断続的な降雨があつたことから、下位葉の葉鞘に病斑が見られるほ場が確認されました。本年は上位葉の葉鞘まで病斑が進展しているほ場は少なかつたと考えられますが、紋枯病が多発すると倒伏の原因になるため、今年多発したほ場は育苗箱処理剤や水面施用剤等で防除を実施しましょう。

④斑点米カムシ類(発生量:やや少ない、※斑点米:やや少ない)

病害虫防除所が7月2～3半旬に実施した調査によると、全県の畦畔における斑点米カムシ類のすくい取り数は10.6頭（平年9.4頭）で平年並、発生地点率は38.8%（平年49.6%）で低くなりました。畦畔に出穂したイネ科雑草が確認されたほ場では、斑点米カムシ類のすくい取り数が多い傾向となりました。

また、8月1半旬の調査では、全県の水田内における斑点米カムシ類のすくい取り数は2.0頭（平年3.6頭）でやや少なく、発生地点率は40.0%（平年50.2%）でやや少なくなりました。水田内にノビエやカヤツリグサ科雑草が発生しているほ場で斑点米カムシ類の発生が多い傾向となりました。

病害虫防除所が実施した斑点米調査によると、斑点米混入率は0.08%（平年0.12%）でやや低く、斑点米混入地点率は45.0%（平年45.6%）で平年並となりました。

8月以降の断続的な降雨により、斑点米カムシ類の増殖及び加害活動が抑制され、斑点米カムシ類の発生量及び斑点米の発生量はやや少なくなったと考えられました。

4 次年度に向けて

(1) 気候変動リスクを軽減する総合的な土づくり

①適切な耕深の確保

- 近年、耕深が浅くなる傾向にあることから、耕起深 15cmを確保し、水稻が根を張り養水分を吸収しやすい環境をつくりましょう。ただし、深耕によって下層のやせた土が混入し、養分吸収量が多くなり生育過剰となる場合があるため、少しづつ耕起深を深くしていきましょう。

②土壤診断に基づく土づくり肥料などの施用

- 定期的に土壤診断を行い養分の過不足を確認して、必要な量のたい肥や土づくり肥料、化学肥料を施用してバランスの良い土壤養分を維持しましょう。
- 土壤養分の中でもケイ酸は根の活力を高めたりする効果があり、高温や日照不足等の異常気象対策にも効果的とされています。糞による持ち出し分のケイ酸を補給するためには、ケイカルで100kg/10aを目安に継続して施用することが必要です。

(2)適期田植えと栽植密度の適正化

- ・ 低温による初期生育の遅延を避け、出穂期の早期化による高温登熟を軽減するため、あきたこまち（中苗）の場合5月20日～25日頃を目安に田植えを行いましょう。日平均気温で稚苗13°C以上、中苗14°C以上（できれば日中の最高気温が20°C以上）に実施し、最高気温15°C以下の日は行わないようにしましょう。
- ・ また、栽植密度や植え付け本数の減少は、その後の茎数（穂数）確保に影響を与え、作柄や品質の低下にもつながります。栽植密度は21～22株/m²（70株/坪）、植え付け本数は中苗で3～4本/株を目安に田植えを行いましょう。本年度当課で調査を行った定点調査では、平年よりも高い収量となりましたが、その一因として、定点調査ほの栽植密度が平均で64株/坪と高い傾向であり、強勢茎主体の分けつ構成となり、十分に登熟できたことが要因ではないかと考えられます。

(3)水稻の生育や気象状況に応じた適切な水管理

①初期生育を確保する水管理の徹底

- ・ 苗は通常4～5日で活着しますが、気温・水温ともに高いほど活着は早くなります。活着するまでは保温効果を高めるため、水深を4cm程度とします。活着が確認された後は、日照の多い日や温暖な日は浅水管理とし、水温・地温を高めて分けつの発生を促進します。

②適期中干しの実施

- ・ 目標とする茎数を確保したら直ちに中干しを行います。期間は7～10日位、田面に亀裂が1～2cm入り足跡がつく程度とします。幼穂形成期に土壤水分が低下すると、1穂粒数の低下を招くため、中干しは幼穂形成期前に終了します。
※中干しを十分に行うことができなかった場合は、落水期間が長めの間断かん水を実施します。

③登熟を促進する水管理

- ・ 出穂当初は水を多く必要とする時期なので、出穂後10日間は湛水管理し、その後は間断かん水とします。落水時期は出穂後30日以降とし、根の機能を維持して登熟を促進します。
また、気温が30°C以上になる場合は、用水の確保が可能であればかけ流しかん水を行います。かけ流しかん水が困難な場合は、飽水管理や落水期間の短い間断かん水により、水分供給と地温の低下を図り、稻体の活力維持に努めます。

(4)積算気温等を目安とした適期刈り取りの実施

- ・ 刈り取り時期は、出穂期後の日平均気温の積算値（あきたこまち等の早生品種で950～1,050°C、ひとめぼれ等の中生品種で1,050～1,150°C）を目安とし、最終的には穂の黄化程度を確認し、黄化が90%以上に達した時期で判断します。
- ・ 刈り遅れによる大きな影響は、胴割れの発生による品質低下です。あきたこまち等の早生品種では、積算気温1,100°Cを超えると発生割合が増加し、特に高温年は胴割れが発生しやすくなるため、適期刈り取りのほか、収穫後の乾燥・調製作業においても細心の注意を払います。